The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	名詞修飾表現における「トイウ」の介在可能性について：「内の関係」の名詞修飾表現を中心に
Author(s)	高橋, 美奈子
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1994, 28, p. 47-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56463
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

名詞修飾表現における「トイウ」の介在可能性について

——「内の関係」の名詞修飾表現を中心に——

高橋美奈子

1 はじめに

節が名詞を修飾している名詞修飾表現（「修飾節＋主名詞」を本稿ではこう呼ぶ）において、修飾節と主名詞との間に介在する語には、「トイウ」「トノ」「ヨウナ」「トイッタ」「トイウヨウナ」等がある。中でも「トイウ」を取りあげて論じた研究が、ここ数年の名詞修飾表現に関する研究の分野で多く見られる。従来、専ら「外の関係」の名詞修飾表現においてその介在が問題にされてきた「トイウ」だが、中畠（1990）の指摘以後、「外の関係」だけでなく「内の関係」の名詞修飾表現に「トイウ」が介在する現象についても触れられるようになっている（大島（1991ａ）、藤田（1991）等）。「内の関係」「外の関係」とは寺村（1975）の術語だが、術語こそ違え、節による名詞修飾表現の構造的な下位分類としてこれに相当するようなものが諸先行研究で認められている。例えば奥津(1974)では「同一名詞連体修飾」「付加名詞連体修飾」、井上（1976）では「関係節」「同格節」と呼ぶ分類がそれである。前者は、主名詞と修飾節中の術語との間に格関係が想定できる、言い換えれば主名詞が修飾節の述語の項に当るような関係を備えた名詞修飾表現を指す。後者は、主名詞と修飾節述語との間にそのような関係がなく、主名詞の意味特性によって修飾節と結びついて

いるような関係を備えた名詞修飾表現を指す。ゆえに、「外の関係」の主名詞になりうる意味特性を持つ名詞（寺村（1977）は、「発話・思考の名詞」「コトを表す名詞」「感覚の名詞」「相対性の名詞」を挙げる）は、「内の関係」を形成することもできるが、名詞の中にはそのような意味特性を持たず、「内の関係」の主名詞にしかなれない名詞もある。例えば、「事実」「噂」「理由」といった名詞は「外の関係」をも「内の関係」をも形成しうるが、人名詞や具体物の名詞は「内の関係」の主名詞にしかならない。

本稿では、「外の関係」の名詞修飾表現の主名詞となるような名詞ではなく、「内の関係」の名詞修飾表現専門と考えられてきた名詞を主名詞とする名詞修飾表現における「トイウ」介在について考察する。そして「トイウ」介在の可能性は、その名詞修飾表現のありようと、次のような関係を持つことを述べる。

[1] a．特定の事象との関連付けによって主名詞を修飾する名詞修飾表現
→「トイウ」介在不可

b．主名詞の特性の叙述によって主名詞を修飾する名詞修飾表現
→「トイウ」介在可能

c．ある場での認識を修飾節とし、その引用によって主名詞を修飾する名詞修飾表現　→「トイウ」介在必要

2 「トイウ」が介在可能な場合

「内の関係」の名詞修飾表現に「という」という語を介在させると、その結果できる表現において、「という」は伝聞の意味を持つモダリティ形式と解釈されることが多い。

（1） 彼が買ってきた本は、あそこにある。

（2） ここは太郎が生まれた土地だ。

（1）′ 彼が買ってきたという本は、あそこにある。

（2）′ ここは太郎が生まれたという土地だ。

（1）（2）のような、多くの「内の関係」の名詞修飾表現では、主名詞はある特定の事象を構成する要素であり、修飾節は時間軸上に位置付けられる特定の事象との関係において主名詞を修飾している（そうではない場合については後述する）。寺村（1976）は「内の関係」と「外の関係」の意味的な違いについて、「「内の関係」で結び付いている連体修飾構造にあっては、意味的には、修飾部は底の名詞を「付加的に」修飾しているに過ぎないが、「外の関係」にあっては、それは底の名詞を「内容補充的に」修飾しているということになる」と述べている。つまり、多くの「内の関係」の名詞修飾表現では、主名詞はその内容は問題にされず、ある特定の事象を構成する要素として、事象への位置づけが問題にされており、事象との関係づけにおいて修飾されている、ということができよう。「という」という語を介在させると、それも事象を構成する要素として、伝聞のモダリティ形式としての解釈がなされることになるのだろう。

しかし「内の関係」の名詞修飾表現にも、伝聞のモダリティ形式とは解されない「トイウ」が介在することがあるとの指摘が中畠（前掲）でなされ、以後大島（前掲）もこの現象に言及している。

そのような名詞修飾表現は、決して稀有のものではない。実例を挙げる。

（3）　かれは生きるために、多くのいまわしい魔法を使わざるを得ないし、そのことで苦悩するというきわめて屈折したヒーローである。　（SF）

（4）　だいたいぼくは、「①賛成②反対③どちらともいえない」式の質問には、いつも③で答えるという灰色の男なのだが、（略）

（朝日）

（5）（彼らは）小さなカンバスに絵筆をふるって絵を描くという芸術家ではなく、一人は鉄パイプを折り曲げて彫像のようなものを作り、一人は糊を塗ったカンバスに電球をぶつけて妖しげな絵を作り、（略）　（乞食）

（6）（夫は）夕方になれば帰宅し、日曜になれば子供と遊ぶという父親ではなかったから、子供たちもさほど寂しくないのかもしれない。　（臨終）

（7）それには理由があって、博物学の図譜をつくるには、ふたつの要素が必要だったからである。（略）絵がうまくてなおかつ博物学ができるという人は、そういない。　（図鑑）

（8）そういうことを言い出せば、精神労働者か肉体労働者かの区別などまことにあやふやなもので、どっちにも分類できるという職業はいくらでもある。　（私説）

（9）最初から適応性があって、人生をたくましく生きていけるという人は、むしろ珍しいんじゃないですか。　（幸福）

（10）私に限らず、bのタイプの人は、けっこう多いのである。生まれつき、煙草の煙に弱いという人は、ここでは別にする。　（時代）

（11）なかなか思い通りの仕事に恵まれないという悪い社会では、こうした過剰適応者がふえる。　（私説）

これらの名詞修飾表現には、「トイウ」の介在しない表現と比較して次のような特色がある。主名詞は、特定の時間軸上に位置付けられる事象との関連付けにおいて修飾されているのではない。上の例が示すように、修飾節述語は、状態性のものや、また動詞でも時制の対立を持たずに習慣や性癖を表すものであって、特定の時間・事象を表すのではない。修飾節は、

主名詞の性質・特性についての叙述となっているのである。「内の関係」即ち主名詞が修飾節述語の項という関係を有する名詞修飾表現ではあるが、述定にするとすれば、主名詞は修飾節に対して、主題にあたる成分となるだろう。

また、目にとまるのは、このような名詞修飾表現が現れる文は、次のいずれかの型に当てはまるものがほとんどを占めるという点である。

〈Ⅰ〉 N1は、……という（Adj.）N2だ／である（及びその否定）[1)]
〈Ⅱ〉 ……というNが〔存在、出現、多寡を表す述語(及びその否定)〕
（いる、ある、現れる、多い、少ない 等）

(3)〜(6)は〈Ⅰ〉、(7)〜(9)は〈Ⅱ〉に当てはまる。このような文の叙述の型と、名詞修飾表現の特色とには密接な関係がある。

〈Ⅰ〉は指示対象を持つ特定存在（(3)ならば「かれ」、(4)ならば「ぼく」等）であるN1を主題とし、名詞修飾表現を述語名詞とすることによって、その特性について説明する文である。「N1は、N2 ── 普通名詞で、N1の上位概念にあたる ── のなかでも、修飾節の述べるような特性を備えたものである」ということを述べる措定文である。〈Ⅱ〉は、名詞修飾表現で表されるものの存在や出現、多寡について述べる文であるが、同様の述語を持つ基本的な存在文や、出現を述べる文とは性格が異なる。「〔場所〕に〔存在の対象〕が　いる／ある」（益岡・田窪1989）（例「机の上に本がある」）というような基本的な存在文では必須の項である「存在の場所」や、「出現の場所」が文中に現れない点にそれが表れている。また時間的に見ても、問題の「存在の対象」はある特定の時において存在している、ということでもない。このような文では、「(その時代の）世間／世の中」が「存在・出現の場所及び時間」に当ると考えていいだろう。場所や時間が不明示というよりは、不問なのである。寺村（1982）は、存在

文の下位分類として、「ある特定の時、ある場所にあるものが存在する」という表現ではなく「部分集合、または種類の存在」を表すものもあると述べている。寺村がその性格を認めているのは「ある」を述語とする存在文についてだが、(7)〜(9)のような文もそのような性格のものと見ることができる。「世間・世の中には、修飾節の述べるような特性を持つNが存在する／現れる／多い・少ない」という叙述である。

「内の関係」の名詞修飾表現に「トイウ」が介在する場合、このように、主名詞の特性の叙述が修飾節となり、主名詞の中からある特性を持つ部分集合を取り出して、その存在を述べたり、特定存在をそこに当てはめたりする叙述になる。このような名詞修飾表現は、構造的には「内の関係」であるが、意味的には主名詞の属性・特性など、いわば「内容」を問題にしている、ということができる。特定の事象、時間との関係づけで名詞を修飾する、「トイウ」介在が不可の「内の関係」の名詞修飾表現と異なる部分はここである。[2)]

中畠（前掲）では、「内の関係」に介在する伝聞のモダリティ形式とは解されない「トイウ」について、

(12)　また碁に熱中して、廊下を歩きながら碁の本を読み、教室でも机の下にかくして碁の問題に没頭するという男があらわれた。

（下線は筆者）

といった実例を挙げ、この場合「そのような変わった（珍しい・きとくな……）男、人」という意味合いが込められ、「トイウ」は「修飾節を話し手の評価の対象として示す」と述べている。

また大島（前掲）では、「トイウ」には「何らかの表現を導く」機能があるとし、同じ例について「「碁に熱中している」度合を節の形で表現すれば修飾節のようになる、ということを表していると考える」と述べてい

る。さらに、

(13)　私はコップ一杯のビールでできあがるという経済的な人間です。

（下線は筆者）

といった作例を挙げて、「『私』がどれほど『経済的（＝下戸）』であるかということを節の形で『表現してみると』修飾節のようになると考える」と説明している。書き方は異なるが、両者とも、「トイウ」の介在を主名詞に対する評価付けとの関わりでとらえているように解せる。

確かに、「内の関係」に「トイウ」が介在する例に、そのようにも解釈できるもの、即ち、主名詞に対する評価づけが形容詞等により明記されたもの、明記されてはいないが想定しやすいものがあることは事実だが、主名詞にこれといった評価付けが想定しにくい例（(5)(6)(8)など）も少なくはないことも事実である。筆者は、むしろ、主名詞に対する評価づけ ── 碁に過度に熱中している男、面白い・奇特な男 ── が生じるとすれば、それは修飾節の叙述内容（(その男が）廊下を歩きながら、また授業中にも碁の本を読んでいること）から生じてくる、と考える。言い換えれば、修飾節の叙述内容によって、何らかの評価づけ ── (3)の「屈折した」、(4)の「灰色の」、(9)では明示されていないが、「立派な・タフな」といった評価づけが想定され得る ── が生じることもあれば、特に生じないこともある、ということである。したがって、「トイウ」は、主名詞の内容を問題にする名詞修飾表現中に介在し、主名詞の特性を述べる修飾節を導くということは言えても、「トイウ」が常に評価付けと関わる、とは必ずしも言えないだろう。[3]「トイウ」の機能はむしろ、主名詞の特性を述べることであり、上のような例の場合、それにより主名詞にあたる名詞の部分集合が取り出されることになる。[4]

3 「トイウ」が介在必要な場合

3-1 修飾節中に「コ系列の指示詞＋助詞」を持つ場合

次のような名詞修飾表現においては、「トイウ」は、必要であろう。なければ、不自然な表現になってしまう。

(14) ご自分の性格の、ここが彼の気に入らなかったという点、ありますか。 (幸福)

(15) この人なら不動坊に似ているという人を幽霊にするんだ。 (古典)

(16) しかし、いいことに、情報化された文明下においては、政治的中枢も経済的中枢も遍在している。ここを押さえれば、全政治的機能が、もしくは全経済的機能が停止するという場所はないかわりに、どこで何をやってもたちまち情報の網に引っかかって、文明に、ある衝撃を与えることができる。 (犯罪)

このような名詞修飾表現は、修飾節中の「コ系列の指示詞＋助詞」はもちろん修飾節述語の項であるが主名詞もまた修飾節述語の項に当るという関係構造をも備えている。これらにおいて興味深いのは、修飾節中の「コ系列の指示詞＋助詞」の存在と「トイウ」の介在必要性とが関連している、という点である。というのは、修飾節中から「コ系列の指示詞＋助詞」を除くと、次のように「トイウ」は絶対に必要というわけではなくなるからである。

(14)′ ご自分の性格の、彼の気に入らなかった点、ありますか。

(15)′ 不動坊に似ている人を幽霊にするんだ。

(16)′ 押さえれば、全政治的機能が、もしくは全経済的機能が停止する場所はないかわりに（略）

もっとも、(14)′～(16)′に「トイウ」を介在させることは可能である。これは、先程見たように、修飾節が主名詞の特性の叙述であるからである。

ところで「内の関係」の名詞修飾表現には、主名詞と修飾節との関係を明らかにするために、「ソ系列の指示詞＋助詞」が「先触れ的ことば」として現れるものがある。次のような表現がそれである。

(17) ……ひどくきれいな手と、そこだけが鋭い知性に輝く目とを持ったその男は、話すこともいちいち風変わりで文学的だ。

(18) 理一自身がそこから逃れたがっていた北海道の土くささの総てを、鮎子は理一の室で遠慮なくさらけ出した。

（この２例は寺村1976より。下線は筆者）

(14)～(16)と(17)(18)は、それぞれ「コ系列の指示詞＋助詞」、「ソ系列の指示詞＋助詞」が修飾節述語に対し、主名詞が持つのと同様の格関係を持つ、という点を同じくするが、前者は「トイウ」の介在を必要とし、後者には「トイウ」は介在しないという違いがある。それはなぜだろうか。

(17)(18)の修飾節中のソ系列の指示詞「そこ」は、それぞれ主名詞「目」「北海道の土くささ」を指示している。一方(14)～(16)のような表現では、いわば想定の上での現場があり、そこにある対象物をコ系列の指示詞で指示している、と考えられるのではないか。「これ」「ここ」は、「そこ」が「目」「土くささ」の指示するように「点」「人」「場所」を直接的に指示するのではなく、いわばワンクッション置いた表現になっている。(14)～(16)と(14)′～(16)′とは、「点」「人」「場所」の中から修飾節により限定されるものを取り出す、という名詞修飾表現の意味は結局同じだが、後者

と比べ、前者は何らかの対象物を想定しての表現であるように受け取れる、という点にもそのことは表れている。では、想定上の指示対象があるとなぜ「トイウ」が必要になるのかというと、この現象は、修飾節が誰かの認識である、ということで説明されないだろうか。例えば(14)は、話し手から聞き手（対話相手）への問い掛けの文であるから、相手の領域中の要素と考えて「そこ」が使われそうなものであるが、実際には「ここ」が用いられている。この文は、聞き手が「ここが彼の気に入らなかった」と考えているという条件に合致する「点」があるかを聞き手に問うている。修飾節「ここが彼の気に入らなかった」は、想定上の場所における聞き手の認識であり、それを引用したものが主名詞を修飾している。(15)(16)でも、「この人なら不動坊に似ている」というのは聞き手の、「ここを押さえれば……停止する」というのは不特定の誰かの認識であり、「トイウ」によってそれが引用されている、と考えるのである。修飾節に「コ系列の指示詞＋助詞」を持たない名詞修飾表現（(14)′等）では、想定の上の対象物もなく、ということは修飾節は誰かの認識というわけではないので引用が行われず、「トイウ」は特に必要とはされないのであろう。[5)]

3-2 「時」を表す名詞が主名詞の場合 ―「内の関係」からのずれ ―

時を表す名詞を主名詞とする次のような名詞修飾表現で、主名詞と修飾節は「内の関係」にある。

(19) ボルジア家がローマのヴァチカン宮殿に君臨していた時代は、美術史的にいえば「クワトロチェント」から「カンチェント」に至る過渡期であって、（略）　（悪女）

(20) 当時、女が身一つで人生を切り拓けるという時代ではありませんでした。私は何度もひどい目に遭いました。　（占星）

(21)　ちょっと姿を消すという時はあっても、店を休みにして、一日中多恵を近所の人が見掛けなかったという日は、昭和十一年中、一日もないそうだよ。　（占星）

「トイウ」の介在しない(19)と介在する(20)(21)とを比べてみると、(19)はある特定の事象との関係付けで修飾されているのに対して、(20)(21)は主名詞「時代」「時」「日」の内容が問題にされている表現である((20)は先に述べた叙述の型〈Ⅰ〉に、(21)は〈Ⅱ〉に当てはまる。）という、**2**で見たのと同様の相違が見られる。

(20)(21)は「トイウ」が介在可能な場合であるが、時を表す名詞を主名詞とする名詞修飾表現には、「トイウ」の介在が必要とされる表現もある。複文中で、主節の事態の時を表す副詞節として用いられる、名詞修飾表現の一部がそれである。

(22)　これも三カ月の間、満足に眠った夜はありませんでした。看病疲れでもう倒れるというときに、ゆかりが亡くなったんです。　（やま）

(23)　いよいよ明日、サンフランシスコ行きの船がパゴパゴの港に入るという夜、総督庁から属官が来て、明朝11時に用意しておくようにとミス・トムスンに命じる。　（手帖）

(24)　あすはいよいよツァールスコエ・セロに向かうという日の前日、光太夫はこの日も亦街へ出たが、（略）　（おろ）

これらの例では、「トイウ」がなければ不自然である。一例を挙げる。

(25)？いよいよ明日、サンフランシスコ行きの船がパゴパゴの港に入る夜、総督庁から属官が来て、（略）

時の名詞を主名詞とし副詞節的に働く名詞修飾表現の多くは、次に示すように、「主名詞の「時」に修飾節の述べる事態が起こる」という関係構造を持つ。

(26) 私達が駅に着いた時、列車は発車した。

(27) 彼が亡くなった日、日本は大変な猛暑だった。

(26)′ その時に、私達が駅に着いた。

(27)′ その日に、彼が亡くなった。

一方、(22)〜(24)の場合は、そのような関係構造を持たない。

(22)′＊そのときに、もう倒れる

(23)′＊その夜に、いよいよ明日……船が港に入る

(24)′＊その日に、あすはいよいよツァールスコエ・セロに向かう

つまり、(22)〜(24)は「内の関係」の名詞修飾表現ではないということになる。といって、時の名詞を主名詞とするこのような名詞修飾表現は、「外の関係」として扱われても来なかった。では修飾節と主名詞とはどのような関係で結び付いているのか。

これらは、複文中で同様の役割（主節の事態の時を表す副詞節）を果たしながら「トイウ」を必要としない名詞修飾表現とは、「修飾節で述べられる事態と主節の述べる事態とに時間的なギャップがある」という点で異なっている。(26)(27)では、主節の述べる事態と、修飾節で述べられる事態、例えば「電車が発車した」ことと「駅に着いた」ことが、同時である。[6] 一方、(22)〜(24)はといえば、修飾節で述べられる事態は、主節の事態の時点から見て、未来に起こり得ることである。[7] 時間的前後関係から言えば、「ゆかりが亡くなった」のは「倒れる」前であり、「属官が来て……命じた」のは「船が港に入る」前夜である。といって、主名詞を

「前」や「前夜」に置き換えることはできない。

(28) * 看病疲れでもう倒れる前に、ゆかりが亡くなったんです。

(29) * いよいよ明日、サンフランシスコ行きの船がパゴパゴの港に入る前夜、総督庁から属官が来て……

(30) * あすはいよいよツァールスコエ・セロに向かう前日

これは、修飾節中に「もう」「いよいよ明日」などといった副詞的成分が存在するためである。これらを除けば、「前」「前夜」「前日」を主名詞とする表現は、不自然ではなく、文は(22)〜(24)と同じ時間的順序を表す。

(31)　看病疲れで倒れる前に、ゆかりが亡くなったんです。

(32)　サンフランシスコ行きの船がパゴパゴの港に入る前夜、総督庁から属官が来て……

(33)　ツァールスコエ・セロに向かう前日の前日、光太夫は……

これらの副詞的成分は、修飾節が、発話時点ではなく、主節時点から見ての表現である、ということを表している。これが、「トイウ」の介在が必要とされる、時の名詞を主名詞とする名詞修飾表現の特色である。これらにおいて、「トイウ」は、**3-1**と同じく、引用の機能を果たしていると考えられる。修飾節の叙述は、主節事態の段階における認識・とらえ方を表したものであり、それを引用したものが時を表す名詞を修飾している、と見ることができる。

4　おわりに

以上、「内の関係」の名詞修飾表現を中心に「トイウ」の介在可能性について述べた。そこに介在する「トイウ」には、「主名詞の特性を叙述する修飾節を導く「トイウ」と、「ある場での認識である修飾節を引用する

「トイウ」がある。

ここで、「外の関係」の名詞修飾表現における「トイウ」介在との関連について簡単に触れておきたい。筆者は「外の関係」の名詞修飾表現を次のように分類して考えている。

①内容補充的な名詞修飾表現

例　彼が帰郷したという知らせ　　彼女が事故現場にいた事実

②修飾節の叙述とその知覚動作が同時的な名詞修飾表現

ピアノを弾く音（が聴こえる。）　　彼女が走る姿（を見掛けた。）

③相対的な名詞修飾表現

出掛ける前　　太郎が座っていた右側

④因果関係的な名詞修飾表現

彼が犯人である証拠　　計画が失敗した原因／理由

①は、発話や思考に関する名詞（言葉、申し出、命令、考え、心配等）を主名詞とし、発話内容・思考内容等を修飾節として引用する表現と、「事実」「事件」「状態」といった名詞を主名詞とする表現に大別できるが、既に多くの指摘があるように、前者においては「トイウ」介在が必要とされ、後者においては可能である、という差異がある。②③では「トイウ」は介在不可、④では概ね介在しない。[8] ②の「音」「姿」などは修飾節の叙述する事象に付随する、と見ることもできる。④の「原因」「理由」等の名詞がそれ自体の内容を修飾節に取る場合は別にあり、[9] 上の例のような表現には「その原因／理由で計画が失敗した」という関係構造が認められる。②④では主名詞は、「内の関係」のような修飾節述語との格関係は持たないにしろ、ある事象との関連付けによって修飾されているととらえることも可能である。とすると、「外の関係」における「トイウ」介在は、次のように言える。これは[1]と似通った傾向を示す。

［2］a．事象との関連付けによって主名詞を修飾する場合
→「トイウ」介在不可

b．修飾節が主名詞の内容を補充する場合　→「トイウ」介在可能

c．修飾節が引用句である場合　→「トイウ」介在必要

「内の関係」「外の関係」を問わず、節による名詞修飾表現における「トイウ」の介在可能性は、このようにまとめられるのではないかというのが当面の見通しだが、より精緻な分析が必要であろう。

注

1) この型の文を、筆者は「N1は〔修飾節＋という＋N2〕だ」という、N1を主題とし名詞修飾表現を述語名詞とする名詞述語文とみなし、N1が修飾節に含まれる（「〔N1は……＋という＋N2〕だ」）とは考えていない。

2)「内の関係」に分類される名詞修飾表現が、「主名詞が特定の事象に位置付けられる」ものと、「主名詞の特性が述べられる」ものの二種に大別されるということを、高橋太郎（1979）も記述している。高橋は、主名詞が修飾節述語の項に当るような名詞修飾表現が、「そのものがどういうことがらとの関係で存在するかをしめすかかわり」である「関係づけのかかわり」と、「そのものがどんな属性をもっているかをしめすかかわり」である「属性づけのかかわり」とに分類されると詳述している。但し、高橋の「属性づけのかかわり」の名詞修飾表現と、「トイウ」介在可能な名詞修飾表現とは、ある程度重なるが、完全に一致するわけではない。例えば、動詞のタ形が形容詞的に働く修飾節と主名詞の間には「トイウ」を介在させることができない。

・彼女は、いろんな面で非常に変わった女性である。

→ ??彼女は、いろんな面で非常に変わったという女性である。

（伝聞解釈になる）

3) 名詞修飾表現中に介在する、比況や推量のモダリティ形式ではない「ヨウナ」は、評価づけの機能を持っている。「ヨウナ」は「トイウ」と異なり、特性の叙述だけでなく、事象からでも主名詞の評価づけを行う（想定させる）機能を持っていると考えられる。次の例を参照されたい。

・(その評論家は)十七歳の時、女学生と駆落ちして、中学を退学させられたような早熟な人物でしてね。　(春夏)

・ゴッホは、酒を飲むと危険人物になるといって、アルルの町から追放されたような人物だ。　(神曲)

4) 固有名詞など、特定の指示対象を持つ名詞が主名詞の場合、修飾節が主名詞の特性の叙述であっても、「トイウ」は伝聞のモダリティ形式との解釈が優勢である。

・十代で妊娠した未婚女性の数が米国内で最も多いというボルティモア市により、1966年に設立されたこの学校で、(略)　(AERA)

5) 次の例でも修飾節中にコ系列の指示詞が現れているが、トイウは介在しない。

・これが最後のきまり手となる宝珠の玉をむざと手放すこと、民部何としても得心いたしません。　(子午線)

指示対象を持つ特定存在の名詞を主名詞とするこの名詞修飾表現の場合は、(14)〜(16)のように、いったん想定上の現場に指示対象を求めるのではなく、「これ」は「宝珠の玉」を直接に指示していると考えられる。

6) 工藤(1992)参照。

7) より詳しくは、「近い未来に起こり得ること」である。主節事態と時間的にあまりに離れた事態では、主節の時を表す副詞節になる意味がないようである。また、主節事態の時点から見て、未来ではなく、過去を副詞節中の時名詞修飾節が表すような例は、未来の例が比較的よく現れるのに対して、実例ではほとんど見つからない。

8) 因果関係的な名詞修飾表現の中には、「トイウ」が介在するものもある。「証拠」「理由」を主名詞とする場合にそれが見られる。「証拠」については大島(1991 b)の指摘がある。

・ここでは、君以外の人間がやったという証拠が何もないのだ。　(幻)

・別に私が事件を解決してはいけないという理由はあるまい。私と御手洗のチームが解決すればそれでいいはずだ。　(占星)

この「トイウ」については、筆者は未解決である。

9) 例：周到な準備を怠ったという原因／理由で、計画が失敗した。

参考文献

井上和子(1976)『変形文法と日本語　上』(大修館書店)

大島資生(1991 a)「連体修飾構造に現れる「という」の機能について」『人文学報』225　東京都立大学人文学部

――――（1991ｂ）「因果関係を表す連体修飾構造――「因果名詞」と「感情名詞」――」『都大論究』28　東京都立大学
奥津敬一郎（1974）『生成日本文法論』（大修館書店）
金水　敏（1988）「日本語における心的空間と名詞句の指示について」『女子大文学（国文編）』39　大阪女子大学国文学科
工藤真由美（1992）「現代日本語の時間の従属構文」『横浜国立大学人文紀要』39
高橋太郎（1979）「連体動詞句と名詞のかかわりあいについての序説」『言語の研究』（むぎ書房）
寺村秀夫（1975～1978）「連体修飾のシンタクスと意味　その１～４」『日本語・日本文化』４～７　大阪外国語大学留学生別科
――――（1982）『日本語のシンタクスと意味　Ｉ』（くろしお出版）
中畠孝幸（1990）「「という」の機能について」『阪大日本語研究』２　大阪大学文学部日本学科（言語系）
藤田保幸（1991）「引用と連体修飾」『表現研究』54
益岡隆志・田窪行則（1989）『基礎日本語文法』（くろしお出版）

用　例　出　典（出典のないものは作例）

ＳＦ：『ＳＦハンドブック』朝日：朝日新聞　乞食：北杜夫『さびしい乞食』臨終：山田風太郎『人間臨終図鑑』図鑑：荒俣宏『図鑑の博物誌』私説：筒井康隆『私説博物誌』幸福：佐藤愛子『こんな幸福もある』時代：小林信彦『時代観察者の冒険』古典：『古典落語』犯罪：別役実『犯罪症候群』悪女：澁澤龍彦『世界悪女物語』占星：島田荘司『占星術殺人事件』やま：重兼芳子『やまあいの煙』手帖：『暮らしの手帖』おろ：井上靖『おろしや国酔夢譚』春夏：吉行淳之介『春夏秋冬女は怖い』神曲：山田風太郎『神曲崩壊』子午線：木下順次『子午線の祀り』幻：アイリッシュ／稲葉明雄訳『幻の女』

（大学院後期課程学生）